



TITLE:

矢田部 - ギルフオド性格検査法による変質性精神病者の性格に関する研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

田村, 貞房

CITATION:

田村, 貞房. 矢田部 - ギルフオド性格検査法による変質性精神病者の性格に関する研究. 京都大学, 1961, 医学博士

ISSUE DATE:

1961-12-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210808>

RIGHT:

| | |
|-------------|--|
| 氏 名 | 田 村 貞 房 た むら さだ ふさ |
| 学 位 の 種 類 | 医 学 博 士 |
| 学 位 記 番 号 | 医 博 第 4 9 号 |
| 学位授与の日付 | 昭 和 36 年 12 月 19 日 |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当 |
| 研究科・専 攻 | 医 学 研 究 科 内 科 系 専 攻 |
| 学 位 論 文 題 目 | 矢田部一ギルフォド性格検査法による変質性精神病患者の 性格に関する研究 |
| 論文調査委員 | (主 査) 教 授 村 上 仁 教 授 前川孫二郎 教 授 大谷 卓造 |

論 文 内 容 の 要 旨

いわゆる変質性精神病の病因については、種々の観点から分析、研究がなされている。その身体的側面としては、主として間脳下垂体系の低格性が示されているが、この低格性を露呈せしめる誘因については、身体的誘因、すなわち、月経、妊娠、疾病等があげられ、また心因的誘因についての検索では、当然患者の病前性格が問題となる。したがって、これまでにその病前性格についての研究も多く、その結果を概観すると、まず、変質性精神病患者の性格は、いわゆる分裂病中核群のそれとは異なり、執着性気質といわれるべき諸特性があげられている。また、その癲癇性性格との親近性が強調せられている。本論文においては、このような変質性精神者の病前性格が、矢田部-ギルフォド性格検査（YGテスト）によりいかに示されるかを統計的方法により検討し、さらにこのようにして示された性格特性の発病への関与の仕方について症例により考察した。

(I) 統計的研究

因子分析的研究により次の諸点が明確に示された。(1)各因子間の分離が充分に行なわれず、全体として未分化未発達傾向を示すこと。すなわち、病前性格の未熟性が示される。これはその因子構造が児童のそれに類似していることでも示されるし、また特に社会性二次因子が児童のそれに類似していることから、社会性の未熟さをうかがうことができる。(2)情緒性一次および二次因子は他因子との結びつきが強く、なんらかの葛藤の場において生じる情緒不安定、心的緊張状態が容易に他の因子に影響を及ぼし、全人格的反応、人格の解体を来しやすいことを示している。これは一次因子間相関行列で攻撃性一次因子を除き、正常人におけるよりも高い相関値を示すことでも示される。さらにこのことと関連して次の諸特性が示される。(i) 社交性第二因子が情緒性因子との結びつきが強く、一因子を構成し得ないこと、このことは社会性の未熟さということもできる。(ii) 思考性尺度は正常人においては情緒性因子と主導性因子との中間に位する尺度であるが、これが情緒性因子に傾き、すなわち、変質性精神病患者の思考が、理性的というよりは感情的な傾向を帯びていることを示している。(3)攻撃性傾向が認められる。これは正常人群において

は衝動性一次因子と呼ばれる因子に攻撃性尺度の高い因子負荷量を示し、本来の衝動性、活動性の尺度が低い負荷量を示すにすぎないことで、この因子が衝動性というよりはむしろ攻撃性一次因子と名付けるのが適当と考えられること。また活動性一次および二次因子に攻撃性の高い因子負荷量を有すること。このように攻撃性尺度が多くの因子に負荷量を有することは、児童においてはよくみられることで、これは児童の攻撃性傾向を示すものであるが、この場合には、このような未熟性のあらわれとみることもできるが、さらに増強された形で示されているといえることができる。

以上を大きくまとめると、未熟性、感情性、攻撃性の3特徴が、YGテストで示された変質性精神病患者の性格特性である。

(II) 症例研究

一例は、内心の強い劣等感をおおうため過度に神経質、几帳面で小心な性格の男が、その防衛機制がなんらかの動機で破壊されたときに、強い劣等感と直面し、不眠を伴う不安発作を来し、急激な人格の解体を来して発病した例である。本症例では性格的なゆがみの発病への関与の仕方についてその機転を明確に示すことができた。他の二例では、ともに溺愛型の家庭に育ち、勝気で、活動的、わがままな攻撃的、積極的な性格と、一方依頼心が強く、子供っぽく、甘えたといった依存的、消極的な傾向の相矛盾した性格が互いに補い合って統一した人格を作ることなく、矛盾のままに残されているため、現実での葛藤の場面でその矛盾が露呈され、人格の解体にまで発展した例である。この例では、溺愛型家庭における性格形成の未熟さと、父に対する両向的感情等で攻撃的傾向が温存されたことを示した。また他に分裂病者において、ときに性格テストとしてではなく、病像を示すような反応——たとえば保続症——を認め、性格テストとしてのYGテストの限界をまとめ、また身体的誘因の明確な例の中には、性格的なかたよりが、それほど明瞭でないものの存することを述べた。

以上具体的には、溺愛型の家庭その他の条件で性格形成が未熟なままに残存し、さらに、父に対する両向的感情その他は、児童の攻撃的傾向をコントロールすることができないのみならず、さらに強める結果となり、かくして形成せられた、攻撃的傾向と、反面の未熟的、依存的傾向の相矛盾した傾向が統一されることなく、矛盾のままに残存していることが、変質性精神病患者の性格特性といえることができる。

論文審査の結果の要旨

変質性精神病患者の性格特徴については、従来も二、三の研究があるが、田村は「矢田部-ギルフォード性格検査」を使用し、その結果を因子分析的に処理して、正常人および児童における所見と比較し、社会的未熟性、感情性、攻撃性などの三つの性格特性が本病者に著しいことを認めた。

次に症例研究によってこれらの性格特徴と発病機転とが密接に関連している3症例を詳しく記載している。

すなわち、本論文は変質性精神病患者の性格特徴を、より科学的な方法で分析し、またこの性格と病状との心理的関連についても明らかにしたもので、学術上有益であり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。